

タイ北部・ポスト狩猟採集民ムラブリにおける乳製品の受容過程と

乳製品の消費をめぐる現状と課題に関する人類学的研究

早稲田大学 二文字屋脩

I 問題の所在

乳利用が盛んな牧畜民とは大きく異なり、狩猟採集民では乳利用は極めて稀である。もっとも、「搾乳することを発明し、乳を利用することによって、ヒトは家畜に生活の多くを依存するようになり、牧畜という新しい生業が始まった」[梅棹 1976] という梅棹の主張に従えば、搾乳も乳利用もないことが、狩猟採集民が狩猟採集民たる所以なのだと言えよう。だが乳利用に対する知識や技術がなくとも、狩猟で得た野生動物の乳を採取・利用することは不可能なことではないし、狩猟採集民が農耕民や牧畜民とのあいだに多様な関係を築いてきたという歴史的事実を踏まえれば、他民族が産出した乳類を利用することも可能であったはずである。しかし実際には狩猟採集民のあいだで乳利用がほとんど認められないために、以上の問いを追求する先行研究はなかなかない。

他方、同時代に生きる狩猟採集民の多くが国家や市場と接合し、外部世界との関わりをますます深めているなか、乳利用や乳製品の受容と消費がみられるようになってきている。例えば開発による社会文化変容を経験したマレーシアの狩猟採集民ラノーでは、町で購入する品目にコンデンスミルクが入るようになったという [Dallos 2011]。また、アフリカ南部の狩猟採集民サンでは、1980年代以降に国家政策により定住化が以前から一部のあいだで食肉用や交換・売買用としてヤギが飼育されていたが、現在は紅茶用のミルクとして利用されている [池谷 2002]。このように、狩猟採集民のあいだで乳類は着実に浸透し、また利用においても多様化がみられるようになってきた。

しかし乳類の受容が積極的な利用と消費に結びつくわけでは必ずしもない。そのような例として、本稿が対象とするタイ北部で唯一の狩猟採集民ムラブリがいる。彼らは 1980 年代から開発の対象となり、大きな社会文化変容を経験してきた。その過程で、乳製品が人々の生活に浸透し、現在では生活のごく一部で消費されている。だが先行研究が希薄であるため、伝統的な生活において乳類を利用してきたのかという素朴な疑問のみならず、近年みる乳製品の受容過程と消費実態についても不明なところが多い。これらの疑問に答えることは、狩猟採集民にとって「未知なる飲食物」の代表格の一つである乳類がどのようにして人々のあいだで受容または消費されていくのかという問いに答えるだけでなく、今後生まれてくる新しい世代の発育発達を考えていく上でも重要な足掛かりとなるだろう。

II 調査対象と調査方法

1. 調査対象

タイ北部には、「チャオ・カオ (*chao khao*=hill tribes)」と総称される少数民族が数多く暮らしているが、そのほとんどがカレンやモン、ミエン、ラフ、リス、アカなど、焼畑移動耕作を主な生業としてきた人びとであるなかで、唯一、狩猟採集を伝統的な生業としてきた人びとがいる。

人口は 450 人程度と極めて少なく、オーストロアジア語族モン・クメール諸語に属するムラブリ語を母語とするムラブリ (the Mlabri) である。彼らはムラブリ語で「森の人」を意味する「ムラブリ」と自称するが、タイ国内では「黄色い葉の精霊 (*phitong lueang*)」というミステリアスな他称で広く知られている。

タイ政府の公式見解では、ムラブリは 20 世紀初頭にラオスからタイに移住してきたとされており、先行研究でもこの見解は支持されている [e.g. Boeles 1963: 153; Trier 2008: 28]。しかし当時のタイ中央政府は

ビルマやラオスと国境を接するタイ北部の国境地域を管理する行政システムも持っておらず、加えて 1886 年にタイ人エリートであるプラチャーカディキットによって書かれた短い論文には、ムラブリが「ピー・パー (*phi pa*=森の精霊)」として登場することから [Thongchai 2000: 45]、ムラブリは少なくとも 19 世紀後半からタイとラオスの国境を中心とした地域で生活してきたものと思われる。

しかし 1980 年代初頭までは他民族とのあいだに限定的な経済的関係を築きつつ狩猟採集活動をベースとした森での遊動生活を送ってきたが、今日では賃金労働や換金作物栽培をベースとした村での定住生活を送っている。ムラブリが定住生活を送る村は、ラオスと国境を接するナーン県、およびその隣県であるプレー県に合わせて五ヶ所ある (図 1)。これらは全て 1980 年代初頭に始まる外国人宣教師による宣教活動や、1980 年代中頃に始まる国家主導の開発プロジェクト、そして 2000 年代後半から始まる王室プロジェクトによって設置されたものである [Nimonjiya 2015]。

2. 調査方法

基本的な調査方法は、参与観察とインタビュー調査である。2018 年 4 月末から 5 月初め (計 7 日間)、そして 2019 年 1 月末 (計 4 日間) にナーン県ウィアンサー郡に所在するファイ・ユアック村 (約 185 人、2019 年 5 月現在) を訪れ、20 代から 50 代の男女を対象に、各年代から 5 人を選定してインタビュー調査を行なった (写真 1)。また以上の調査期間中に、現地の行政機関や研究機関

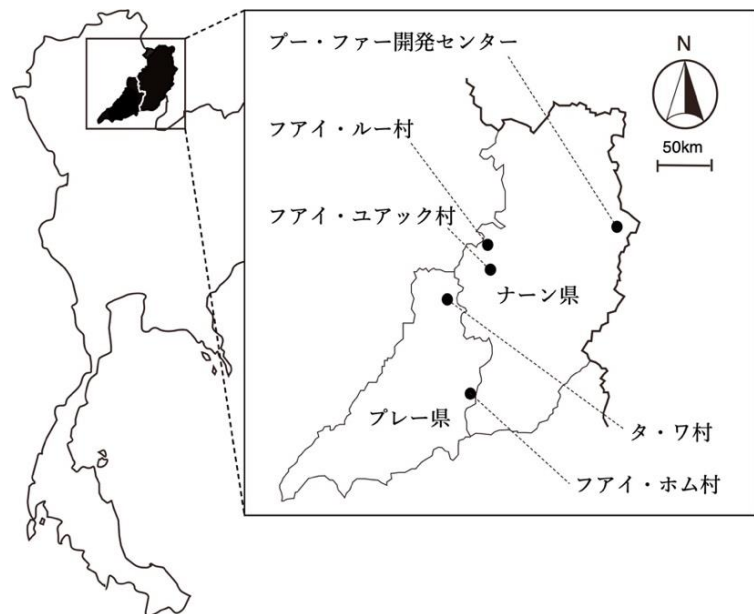


図 1. ムラブリの定住村 (筆者作成)



写真 1. 筆者のインタビューに答えるムラブリ男性 (足元には彼の孫が飲んだ牛乳パックが置かれている)

で関連資料の収集を行い、タイにおける幼児・初等教育と乳製品の関係について文献史料を収集した。なお、実地調査は日本文化人類学会による『日本文化人類学会倫理綱領』（2008年6月施行）に基づき、調査対象者に研究目的・調査方法について口頭で説明して同意を得た上で行なった。文中にはタイ語とムラブリ語の表記が出てくるが、両者を区別するため、前者は斜体に下線を付して表記し、後者は斜体のみで表記した。

III ムラブリと乳

1. 伝統的生活にみる乳利用

「彼らは生肉、生血、または乳は摂らない」[ベルナツィーク 1968]。これは1930年代中頃にムラブリに関する本格的な調査を初めて行った、オーストリア民族学者のベルナツィークが残した一文である。彼が指摘する通り、ムラブリは生の肉や血はおろか、乳類も口にしていなかった。ムラブリ語で乳類は全て *nom* だが、これはタイ語からの借用語であることから、乳類は外部から入ってきたものとひとまずは指摘しうる。だがそれでも、ムラブリは乳類を口にすることを強く避けてきた。その理由として挙げられるのが、「汚い (*ba ah*)」に代表される、「穢れ」に対する忌避感情である。ここでいう「汚い」とは、糞や死体といった物質的な不潔さを示す語彙であるが、生ものに対する忌避感情を表現するときにも用いられる。火が通っていないために、腹痛や下痢を引き起こす要因となる不衛生さを指摘する際にも用いられる。ムラブリでは回虫 (*pha yat*) の存在が認められ、生ものは「(体を) 衰弱させる (*ja lah*)」という。狩猟採集民のみならず、人間社会が生ものを避け、火を通すことで衛生上の安全を確保してきたことはよく知られているが [ランガム 2010]、ムラブリでは経験に裏打ちされた、生ものに対する忌避感情の延長線上に乳類が位置づけられているのである。しかしそうであるなら、乳類に火を通せば口にすることが可能なのではないかと考えられるが、ムラブリでは加熱による乳利用もなかった。その背景には、周辺に暮らす他民族の存在があると考えられる。

ムラブリはこれまで、モンやミエンといった焼畑農耕民と経済的な関係を築いてきた。彼らはウシなどの家畜飼育にも従事してきたが、そうした他民族との沈黙交易や物々交換を通じた交換物に乳類が入っていてもおかしくない。しかし1980年代にムラブリと他民族との民族間関係を調査したタイ人研究者の研究によれば [Chanan 1992: 101]、他民族との交換リストに乳類は含まれていない (表 1)。

表 1. 1980 年代前後の交換物の変化

	ムラブリ→モン	モン→ムラブリ
1980年代以前	蜂蜜、蜂、蜜蝋、サイの角、象牙、籐製の籠と敷物、クマの胆嚢、ヤマイモ、野生動物、タケノコ、薬草	塩、衣類、毛布、鉄、タバコ、マッチ、豚肉、米
1980年代当時	労働力、籐製の籠と敷物	塩、衣類、毛布、ナイフ、マッチ、ライター、タバコ、懐中電灯、医薬品、時計、指輪、コショウ、耳飾り、ビーズ、ハサミ、ラジオ、石鹸、シャンプー

その要因として考えられるのは、焼畑農耕民にみる家畜飼育は、食用や儀礼用であって、乳の利用を目的としたものではなかったことである。概して、ムラブリが乳類を利用してこなかったのは、生もの全般に対する忌避感情のみならず、他民族の資源利用のあり方がムラブリと乳類を結びつけることがなかった点にも求めることができるだろう。

2. 定住生活における乳利用

外国人宣教師や政府当局といった外部アクターの影響の下、1980年代から徐々に始まった定住化を通じて状況は一変した。以前とは真逆の生活を送るようになった今日、ムラブリでは乳利用がみられる。もっとも、ファイ・ユアック村で利用されているのは、市販された牛乳やヨーグルトなどの乳製品である。開発の名の下に、政府当局らは狩猟採集に代わる代替生業として家畜飼育の導入を何度か試みてきたが、それらは定着しなかった。家畜飼育に関する知識と技術がなかったからである。実際、代替生業として与えられた家畜（ウシ、ブタ、ニワトリなど）は食べてしまうか、近隣農耕民に売ってしまった。



写真 2. 近くの売店で売られている牛乳

そのため乳類を利用する場合、それらは必然的に村の外に求めなければならないが、最も近いナーンの町まで 40 キロメートルほど離れているファイ・ユアック村では、距離の遠さと移動手段の困難さから、町へのアクセスは極めて限られた活動となっている。そのため食料品や日用品は、毎朝毎夕に近隣の村からやってくる行商や、500 メートルほど離れたモンの村にある売店で入手される。行商はビニール袋に小分けにした惣菜やお菓子を主に売っているため乳製品は扱っていないが、豊富な品揃えのある売店などでは、紙パックに入った牛乳や、小さなプラスチック容器に入ったヨーグルトが売られている（写真 2）。

ムラブリ曰く、普通の牛乳は「(味が) 薄い (sa. pha)」ため、あまり人気がない。しかし味の種類は豊富で、イチゴ味やリンゴ味、チョコレート味などの牛乳が、一つ 5 バーツで売られている。これら味付けされた牛乳は、とくに子供たちに人気が高い。しかしそれでも頻繁に消費されるわけではない。実際に子供たちが好んで購入するのは、ジュースやお菓子である。後に詳述するように、消費量は決して多いとはいえないものの、定住化以前は乳類が全く口にされなかったことを踏まえれば、ムラブリの生活に乳製品が身近なものとして浸透している状況は大きな変化であると言えよう。こうした状況はどのように生じてきたのか。次章では主に幼児・初等教育との関連から明らかにしていく。

IV 幼児・初等教育と牛乳

1. 幼児開発センターにみる「教育」

ムラブリでの乳製品の受容と消費に大きな影響力を与えたのが、幼児・初等教育の導入である。1990年代後半、政府当局はファイ・ユアック村周辺の森で暮らしていたムラブリの定住化に着手した。こうした「開発」の名の下に行われた政府の働きかけは、遊動生活から定住生活へ、そして狩猟採集から代替生業へという、脱遊動狩猟採集民化を目的としたものであった〔二文字屋 2017〕。

ファイ・ユアック村では実に様々な公的機関が開発に関わっているが、そのなかでも郡と村の中間に位置する行政単位であるタンボン(Tambon)に設置された自治体、とりわけその直接的な管理下にある幼児開発センターが、幼児・初等教育に関して大きな役割を担っている。これは小学校入学前の子供（3歳から6歳）を対象とした教育施設であり、一般的な幼稚園に極めて近い施設である。ファイ・ユアック村の幼児開発センターでは、タンボン自治体のタイ人職員が二名配置され、平日朝8時から夕方4時まで子供たちの面倒を見ている。2018年5月の時点で、男女合わせて27人（男児11名、女児16名）の子供が幼児開発センターに通っていたが、ここでは主に、タイ語による子供向けのテレビ番組の視聴や簡単なゲームなどを通じて、タイ語のみならず、タイ社会での礼儀作法や価値観を学び、タイ人性(Thainess)の涵養が行われている。これに加えて歯磨きや水浴びなどの公衆衛生教育も行われ、子供たちは基本的な生活習慣を身につけていく。そして健全な発育のために、昼食時にはタイ政府が定めたガイドラインに基づいて調理された給食が提供される。給食では牛乳は提供されないが、帰宅時間となる夕方四時には牛乳が配られている。牛乳の配給では一列に並んだ子供に対して、1人につき1パック(200ml)の牛乳がタイ人教師の手から直接配られるのだが、興味深いのは、受け取りの際には「ワイ」と呼ばれるタイ式の挨拶が指示されていることである（写真3）。つまり合掌によって謝意を示すという、タイ社会で重視される礼儀作法が牛乳の配給とともに学習されている。なお、幼児開発センターで消費されている牛乳は、三ヶ月から半年に一回のペースでタンボン自治体から幼児開発センターへと配達される仕組みになっている。そして配達された牛乳は、センターの倉庫には常に牛乳の入った段ボール箱が山積みになって保管されている（写真4）。



写真 3. タイ人教師から牛乳を受け取る子供



写真 4. 倉庫に保管されている牛乳

2. タイにおける学乳事業

タイでは子供の健全な発育と酪農産業の拡大を目指した学乳事業(School Milk Programme)が1992年に開始された [Issara Suwanabol 2005]。当初は幼稚園の年少児童を対象とするものだったが、その後は対象が拡大し、2005年には幼稚園に通う児童と小学校4年生までの児童を対象に事業が実施された [Kanemasu 2007]。現在では全国に4万校ある公立学校に通う760万人の児童に対して、牛乳が栄養補給飲料として配給されている。

今日の学乳事業の運営を担っているのは、農業・協同組合省の下に2009年に設置されたミルク委員会である。それ以前は1985年に設置された国家飲乳キャンペーン委員会が同事業を運営していたが、汚職問題が発覚したため、新たな組織としてミルク委員会が設置された。なお、タイでは年間100万トン以上もの牛乳が生産されているが、そのうちの40パーセントもの牛乳が学乳事業で消費されている [Jitsiree 2015]。総じて40万トンもの牛乳が学乳事業で消費されていることになり、その予算は年間150億バーツにも上る。

幼児開発センターでの牛乳の提供は、こうした学乳事業の一環である。学乳事業の効果を評価するため、センターで働く職員は、子供の体重と身長を毎月計測して記録し、タンボン自治体に報告している。牛乳に関しては、年齢ごとに分けられたノートに、牛乳を飲んだ日にチェックを入れる形で記録されている(写真5)。この記録結果はタンボン自治体に報告する義務はなく、年に一度の頻度でくる町の医者や、定期的に来る隣村のクリニックで働く医者に見せる程度である。なお、ムラブリは近隣に暮らすモンに比べて経済的に貧しいこともあり、大人のみならず、子供たちもまた栄養価の高い食事を毎日摂ることは容易ではない [cf. Ohsawa et al. 2014]。子供の発育と食事の関連性についてはより詳細な調査が必要だが、ムラブリとモンの子供の身体測定を行った才田と伊藤によれば、両者の体格差に大きな差異は見られない [才田・伊藤 2017]。牛乳の消費が子供の発育に少なからぬ影響を与えていると推測されるが、ひとまずここでは、全国規模で展開されている学乳事業を通して、かつて狩猟採集民であったムラブリのなかに、牛乳が浸透してきた歴史的背景を確認しておきたい。

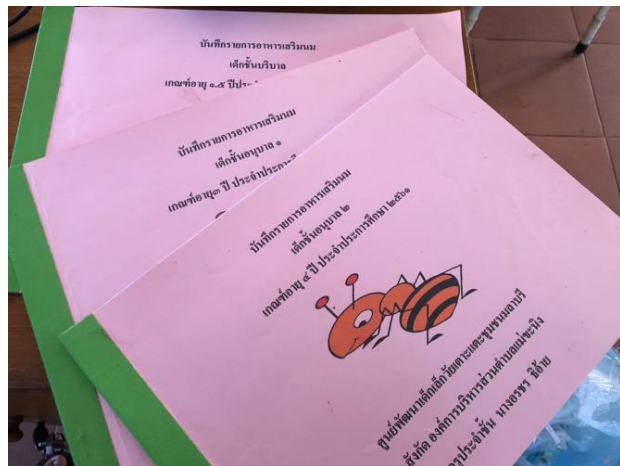


写真5. 年齢別の学乳記録ノート

3. 今日における乳製品の消費

ムラブリにおいて乳製品が受容された大きな要因には、先の幼児開発センターの存在が大きい。これは家畜飼育にも従事してきたモンでも同様である。モンは家畜を儀礼用や食肉用として飼育してきたが、彼らもまた搾乳技術を持たなかったために政府の開発対象となるまでは乳類をほとんど口にしていなかった。だが現在、モンは町や村の売店で牛乳を購入し、消費している。その背景には、幼児開発センターをはじめとする、政府からの長年にわたる生活習慣の指導があった。例えばムラブリの隣の村で売店を営むモン男性は、店で牛乳を取り扱っていることもあり、

毎日のように牛乳を消費するという。その理由として彼は、牛乳からのカルシウム摂取が健康の秘訣であると豪語する。その上で、ムラブリが牛乳を買いに来る頻度を聞いたところ、「ほとんどない」というのが彼の回答だった。「トーン・ルアン（ムラブリの別称）は牛乳が健康のために必要な飲み物であることを知らないんだ」（括弧内筆者）という。

ムラブリが乳製品をほとんど購入することがないという彼の見解は、ムラブリを対象とする調査でも支持される。しかし栄養学的な知識の欠如が、乳製品の消費が低いレベルにあることの理由では必ずしもない。実際に、多くのムラブリが「体に良い(*sukkaphap dii*)」として、牛乳の栄養学的価値に理解を示す。だがそれが乳製品の積極的な消費行動へと結びついていないのが現状である。その根本的な要因として、乳製品へのアクセスの難しさが挙げられる。既述したように、幼児開発センターでは毎日のように牛乳が提供される。近隣にある小中学校でも牛乳の配給制度があるが、こうした配給制度以外で乳製品を消費するためには、乳製品を外部に求めなければならないことになる。つまり乳製品の入手には「購入」という経済活動を伴うわけだが、そのためにはある程度の経済的余裕を条件とする。つまりかつては生もの全般に対する文化的な忌避感情や他民族の乳利用の状況がムラブリにおける乳類の利用を阻害ないし制限してきたが、今日では経済的状況が乳製品の優先順位の低さを強く規定しているのである。このことを明らかにするため、次章ではムラブリの経済状況に焦点を当てることで、乳製品の購入と消費が現実的な選択肢ではないことを示す。

V 経済状況と乳製品の消費

1. ムラブリを取り巻く経済状況

フアイ・ユアック村での主な生計手段は、近隣に暮らすモンやミエンといった他民族が所有する畑での賃金労働である。他民族が所有する畑での農作業で得られる収入は、時期に応じた作業内容によって増減するが、基本的には日当 200 バーツ（700 円、1 バーツ＝3.5 円で計算）である。これはナーン県の 1 日あたりの最低賃金 315 バーツ（2018 年現在）に比べれば低いレベルにあるが、山地という地理的な特殊性をもった地域では取り立てて低い額というわけではない。とはいえ、一人当たりの一ヶ月の収入はおよそ 5,000 バーツ（17,500 円）弱となり、決して贅沢ができるほどの収入であるとはいえないのが実際のところである。事実、ムラブリの食卓に並ぶのは、塩と化学調味料で味付けされた野菜煮込みやインスタントラーメンなどであり、野菜類に比べて高額な肉類を毎日消費できるほどの経済的余裕はない。

こうした中でムラブリの家計を補填しているのがタンブン（徳を積む）である。仏教徒が 90 パーセント以上を占めるタイでは、タンブンに高い価値が置かれていることもあり、フアイ・ユアック村にはタイ人が頻繁に訪れ、食料品や衣類が寄付される。食料品の中には魚の缶詰やインスタントラーメン、お菓子類、そして牛乳が入っていることもある。だが生活全体で見れば、タンブンによる食料獲得は部分的なものに留まっている。

次節で詳しくみるように、仮に 1 日 200 バーツの収入が得られたとしても、そこから食費を始めとする日々の生活費、さらには子供がねだるお菓子や重要な移動手段であるバイクのガソリン代を差し引けば、手元に残るのはせいぜい 50 バーツ（175 円）が良いところである。もちろんこれは扶養対象となる子供がいる場合であり、その責任を負う必要のない若者にはより多くのお金の手元に残るが、彼らは酒やタバコといった嗜好品を志向するため、手元に十分なお金が残るこ

とはない。もっとも、狩猟採集民では貯蓄に対する関心が相対的に低く、ムラブリもまたその例外ではない。しかしこのことを差し引いてもなお、乳製品の消費は大きく制限されている。その主な要因が借金である。

生活費の補填を理由とする数百パーツ程度の小規模な借金から、換金作物栽培に掛かる資金を理由とする数千から数万パーツもの借金など、使途によって借金の額は様々だが、フアイ・ユアック村ではほぼ全ての世帯が借金を抱えている。基本的には賃金労働で得られた収入が生活費に充てられるが、その一部は借金返済に回されるため、手元に十分なお金が残らないのが現状である。一方で、狩猟採集民が「眼前への関心」[Ichikawa 2000]を有していること、さらには「機会主義」とも「日和見主義」[ダロス 2005]とも形容される態度も、ムラブリが経済的余裕を持たないことの要因として指摘できるだろう。事実、ムラブリは日雇労働や換金作物栽培で得た収入を躊躇なく浪費する。例えば、毎年2月から3月にかけて得られる換金作物栽培からの収入は、借金の返済だけでなく、普段は買うことのできない農具やバイクの購入、さらには自転車などの子供への贈物で瞬く間に底をつく。草刈機や農薬散布用のポンプといった農具の購入は一種の投資であるとも言えるが、しかし古くなった農具の修理費に回せば節約ができると思えるものの、中古の農具は親族や仲のいい友人に譲与して新品を買うなど、一見すると不合理な現金の消費が目立つ。貯蓄することなく即時的に金品を消費するような経済のあり方をウッドバーンは即時利得型システム(immediate-return system)と呼び、狩猟採集民に広く認められる経済システムであると論じたが[Woodburn 1982]、これはムラブリにも当てはまる。

とはいえ、近くの売店で売られている牛乳は5パーツで購入可能である。つまり借金や即時的な浪費が牛乳の購入と消費を制限しているとはいえ、それだけが乳製品の消費が未だ低いレベルに留まっている要因とは言えない。そこで最後に、ムラブリの財布事情を探ることで、より根本的な要因について若干の考察をしておきたい。

2. ムラブリの財布事情

休耕期間では日当が得られないなど、生活の状況変化によってムラブリの財布事情は異なるが、ここでは調査期間に収集したデータからムラブリの消費行動を探っていく。

ムラブリが頻繁に買い物を行う隣村の売店で売られている品目と値段を一覧にしたのが表2である。実際には多種多様な品物が販売されているが、ここではムラブリがとくに購入対象とする代表的な品目に加えて、いくつかの比較対象を含めた。この表を基準としながら、性別・年齢・同居人数の異なる人々をバランスよく選出し、個々人の一日の消費額と乳製品購入の有無

表2. 主だった食料品と嗜好品の価格

品目	値段 (パーツ)
鶏ガラ	35/kg
鶏モモ	85/kg
豚肉	130/kg
手巻きタバコ	10/袋
フィルタータバコ	10/2本
蒸留酒 (袋)	55/袋
蒸留酒 (瓶)	85/瓶
缶ビール	35/缶
野菜	25/kg
惣菜	20/袋
インスタントコーヒー	5/袋
インスタントラーメン	5/袋
ガソリン	45/ℓ

に関して有意な調査結果を得られたものをまとめたのが表 3 である。ここでは男性と女性に分けた上で、年齢が低い方から順にデータを配置している。データの単位を世帯ではなく個人にしているのは、ムラブリにおける家計が、例えば家族の収入を家長に集めて再分配するものではなく、あくまで収入を得た個人がその使い道に対して決定権を持っているからである。もっとも、そうであるからといって、個々人が得た収入を全て自分のために使うわけではない。一部の人は同居する年老いた親にお金を渡したりすることのほかに、病気やバイクの故障といった不測の事態のために収入の一部を貯金したり、収入の一部を借金返済に充てることもある。

表 3. 一日の使用額とその内訳

対象者	性別／年齢	同居人数	一日の消費額	消費の内訳
A	女性／19歳	4人	160バーツ	お菓子、おかず、牛乳、
B	女性／21歳	5人	175バーツ	シャンプー、お菓子、卵、鶏肉、牛乳
C	女性／29歳	4人	120バーツ	鶏ガラ、果物、野菜、コーヒー
D	女性／32歳	4人	100バーツ	鶏ガラ、白菜、おかず、お菓子、コーヒー
E	女性／40歳	3人	150バーツ	鶏ガラ、豚肉、肉団子、お菓子、コーヒー
F	女性／41歳	2人	100バーツ	鶏ガラ、お菓子、コーヒー
G	女性／46歳	5人	180バーツ	豚肉、野菜、おかず、お菓子、コーヒー
H	男性／24歳	4人	185バーツ	蒸留酒、鶏ガラ、おかず、お菓子、ガソリン
I	男性／24歳	5人	170バーツ	蒸留酒、鶏ガラ、野菜、お菓子、ガソリン
J	男性／31歳	3人	180バーツ	蒸留酒、豚肉、野菜、お菓子、コーヒー
K	男性／42歳	3人	100バーツ	鶏ガラ、おかず、お菓子、コーヒー
L	男性／43歳	3人	190バーツ	蒸留酒、豚肉、野菜、お菓子、ガソリン
M	男性／50歳	6人	215バーツ	豚肉、鶏ガラ、タバコ、蒸留酒、ガソリン
N	男性／53歳	6人	155バーツ	蒸留酒、ガソリン、おかず、コーヒー

結論を先取りするというならば、最低でも日当の半分である 100 バーツが 1 日で消費され、日当に近い金額を消費することも少なくないにもかかわらず、乳製品の購入がほとんど認められないという結果になる。家族を持つ 14 人のうち、乳製品を購入していたのはたったの 2 人だった。

ここで重要なのは、この 2 人がどちらも子供を持つ若い女性であるという点である。そこにはまず、男女間の差が指摘できる。ムラブリでは、ほとんどの男性が嗜好品としてのタバコとお酒を日常的に口にする。ムラブリはビールを好むが、アルコール度数が低い上に比較的高額であるため、現実的な選択肢として蒸留酒の消費が最も多い。もちろん、蒸留酒を購入しない者も一部いるが、これは畑仕事の際に雇用主からもらったり、すでにお酒を購入した人の家で飲酒したりするためである。この他、女性よりも男性に多く購入されているものに、バイク用のガソリンがある。これはバイクの所有者兼運転手が男性であることが多いためである。だがそれ以外では購入品目に男女に大きな差があるわけではない。男女ともに共通するのは、家族が口にする野菜類や肉類の購入（およそ 120 バーツ）が一日の消費の大半を占めているのであり、これに子供用のお菓子類（およそ 20 バーツ）や嗜好品としてのコーヒーが加わる。結果、手元に残るのは 10～100 バーツとなる。なお、豚肉が高いために鶏ガラがよく消費されることから、ムラブリの経済的な困窮の一端を垣間見ることができるだろう。

ここで乳製品を日常的に購入する若い女性 2 人に話を戻そう。彼女たちが乳製品の購入理由として挙げたのは、「子供の健康のため」という理由であり、彼女たち自身は幼児開発センターや小

中学校等での教育を通じて、機会とお金さえあれば、自分の子供にも乳類を飲ませよう心掛けているという。そのため、無理のない範囲で牛乳を購入しているとのことだった。このことはすなわち、開発の名の下にパッケージ化され導入された栄養学的知識が、若い親世代に乳製品の利用を後押ししていることを示唆している。

では他の者たちはどうだろうか。とくに男性たちの消費行動は嗜好品をはじめとする品目に集中しているが、これを差し引いても指摘しうるのは、全員が家族の食料品を積極的に購入している様子である。だが決して高価ではない乳製品が消費されることはない。一部の者は平日ならば幼児開発センターで牛乳が貰えるのだからそれで事足りると考え、他の者は乳製品の栄養学的価値に理解を示すものの子供の発育に必要なものであるとは考えておらず、また子供も実際には牛乳よりもジュースなどをねだるため牛乳をあえて購入することがないというのが大方の見解であった。このことはすなわち、乳製品の消費が低いレベルに留まっている根本的な要因とは、借金でも低賃金でもなく、日常的に消費されるほどの価値を乳製品が未だ持ち得ていないことを示唆している。

VI 結語

伝統的な生活においてムラブリが乳類を利用してこなかったのは、生もの全般に対する忌避感情があった。また経済的関係を築いてきた他民族は家畜飼育にも従事していたが、彼らもまた乳類を利用することはなかったために、ムラブリが乳利用を可能とする環境が用意されてこなかったことが、従来においてムラブリが乳類にアクセスしてこなかった要因であると考えられる。

だが 1980 年代中頃から始まる開発を通じて状況は大きく変わった。今日の定住生活では、タイ全国で展開する学乳事業を背景に、幼児開発センターや近隣の小中学校でムラブリの子どもたちは牛乳を飲む機会が増えただけでなく、他民族が経営する小さな売店では、牛乳やヨーグルトといった乳製品が購入可能となっている。概して、乳製品はムラブリにとっても身近な存在となった。とはいえ、実際の生活で乳製品が盛んに消費されているとは言い難いのが現状である。その主な要因として経済的な困窮が指摘しうる。だが乳製品が決して高額ではないことを考えれば、直接的な要因は別なところにある。端的にいえば、日々の生活で乳製品をあえて購入・消費することに価値があまり置かれていないということである。乳製品は栄養学的な観点に基づいて外部から導入されたものの、ムラブリが乳類を求める時には市場原理に基づいて流通する乳製品がその対象となるが、乳製品は「嗜好品」とも「日用品」ともいえない中途半端な位置づけにあることが、今日の状況を規定している。

しかし日常的に牛乳を購入し子供に与えている若い女性 2 人の事例が示唆するように、牛乳をはじめとする乳製品に栄養学的価値があることが、開発の一環である教育を通じてさらに浸透していけば、乳製品への購買意欲が増していく可能性は十分に指摘できるだろう。乳製品が外部からもたらされたという歴史的事実と同様に、これまで乳類に馴染みのなかった人々の消費行動を変えるのもまた、外部の力である。つまり幼児開発センターや小中学校といった教育制度を経由した若い世代が結婚をし、子供をもつとき、状況は大きく変わっていくのではないだろうか。村生まれ村育ちの若い世代のなかでも、幼児開発センターや小中学校で日常的に牛乳を口にした新しい世代が親となれば、状況はさらに一変していくことが予想される。

近年、大澤らによってムラブリの身体発達と子どもの発育に関する量的研究〔大澤ほか 2018a;

大澤ほか 2018b; 大澤ほか 2018c] が蓄積されてきているが、そうした今後の状況変化によっては、大澤らの研究結果にも影響を与えることになるだろう。引き続き、世代間の知識や経験の差異を考慮に入れながら、乳製品を取り巻く状況の変遷を、とりわけ若い世代を取り巻く教育状況と経済状況から読み解いていく必要がある。

引用文献

- ベルナツィーク、H. A. 1968 『黄色い葉の精霊：インドシナ山岳民族誌』、大林太良訳、平凡社。
- Boeles, J.J. 1963 “Second Expedition to the Mrabri of North Thailand (“Khon Pa”)”. *Journal of the Siam Society* 51(1): 133-160.
- Chanan Vongvipak 1992 “Economic and Social Change among the Mlabri”. In: Surin Pookajorn and Staff (eds.), *The Phi Tong Luang (Mlabri): A Hunter-Gatherer Group in Thailand*. Odeon Store, pp. 92-103.
- ダロス、C. 2005 「交易と分配：狩猟採集民の社会人類学」永田脩一訳、『熱帯アジアの森の民：資源利用の環境人類学』池谷和信編、人文書院、pp. 97-120。
- Dallos, C. 2011 *From Equality to Inequality: Social Change among Newly Sedentary Lanoh Hunter-Gatherer Traders of Peninsular Malaysia*, University of Toronto Press.
- Ichikawa, M. 2000 “Interest in the Present” in the Nationwide Monetary Economy: The Case of Mbuti Hunters in Zaire”. In Schweitzer, P., M. Biesele and R. K. Hitchcock (eds.) *Hunters and Gatherers in the Modern World*. Oxford: Berghahn, pp. 263-274.
- 池谷和信 2002 『国家のなかでの狩猟採集民：カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』、国立民族学博物館。
- Issara Suwanabol 2005 “School Milk Programme in Thailand”, A paper presented at the 3rd International School Milk Conference.
- Jitsiree Thongnoi 2015 “Milking the System”, Bangkok Post, 2015. 10. 18. (<https://www.bangkokpost.com/news/specialreports/733380/milking-the-system>, (最終閲覧日：2018年11月4日))
- Kanemasu, Y. 2007 “Thailand: A Desk Review of the School Feeding Programmes”, Cardiff University for WFP, 24-28.
- Nimonjiya, S. 2015 “From ‘Ghosts’, to ‘Hill Tribe’, to Thai Citizens: Towards a New History of the Mlabri of Northern Thailand” *Aséanie* 32: 155-176.
- 二文字屋脩 2017 「終わらない開発：ポスト遊動狩猟採集民ムラブリの現状分析」『東南アジア研究』、5(2): 205-236。
- 大澤清二・下田敦子・シスコンタミット, S.・ブラディット, N. 2018a 「思春期の身長発育スパークが見られないムラブリ人について」『発育発達研究』、80: 30-38。
- 大澤清二・下田敦子・シスコンタミット, S.・ブラディット, N. 2018b 「狩猟採集民ムラブリの体重、座高および長い発育期と生涯を2期に分ける BMI の特徴について」『発育発達研究』81: 21-31。
- 大澤清二・下田敦子・シスコンタミット, S.・ブラディット, N. 2018c 「狩猟採集民ムラブリの握力の発達に関する研究」『発育発達研究』81: 1-9。

- Ohsawa, S., Nimonjiya, S. and Shimoda, A. 2014 “Field Notes on the Dietary Habits of the Mlabri Hunter-Gatherers in Thailand” *International Journal of Human Culture Studies*, 24: 234-244.
- 才田春夫・伊藤雄馬 2017 「狩猟採集遊動生活から定住生活への移行期におけるムラブリ支援活動の評価」『富山国際大学現代社会学部紀要』、10(1): 25-32。
- Thongchai Winichakul 2000 “The Others Within: Travel and Ethno-Special Differentiation of Siamese Subjects 1885-1910”. In Turton, A. (ed.) *Civility and Savagery: Social Identity in Tai States*. Richmond: Curzon Press, pp. 38-62.
- Trier, J. 2008 *Invoking the Spirits: Fieldwork on the Material and Spiritual Life of the Hunter-Gatherers Mlabri in Northern Thailand*. Aarhus: Aarhus University Press.
- 梅棹忠夫 1976 『狩猟と遊牧の世界』、講談社。
- ランガム、R. 2010 『火の賜物-ヒトは料理で進化した』、NTT 出版。
- Woodburn, J. 1982 “Egalitarian Societies”. *Man* 17(3): 431-451.